月経のエスノグラフィー

―人々はなぜためらうのか―

佐藤茉有

キーワード:月経、ためらい、ケガレ、ハビトゥス、ネイティブ人類学

要　旨

本研究では、衛生観念が浸透し、義務教育課程において何段階かに分けて男女ともに月経に関する教育が行われている現代の日本において、未だに残っている、「月経について話すことをためらってしまう」行為が生み出される理由について明らかにしていく。

本論文は10章構成であり、まず、序論である第1章において本研究の目的、背景、本研究の構成について述べた後、第2章において月経の基礎的な情報、月経の取り扱い方の歴史について述べ、月経に対する理解を深める。続く第3章において、月経に関する人類学的な研究、本論で使用する理論について述べた後、第4章でこれらの概念などを踏まえた本研究の位置づけを改めて確認する。そして、第5章において、本研究の調査手法、調査倫理について述べる。第6章では、月経について話すことをためらってしまうと回答したインタビュー協力者のためらう理由について、月経を体験しない「男性」と、実際に体験する「女性」に分けて結果と分析、考察を述べる。続く第7章では、月経に関する日本の教育について、筆者が高校生時代に使用していた教科書を引用しつつ、現代の日本における月経に関する学校教育の課題について考察を深める。第8章では一転して、月経について話すことをためらわないと話す人々について取り上げて、どのような理由、背景がためらわないという行為と関わっているのかについて論じた後、第9章において、月経について話すことをためらう度合いや、月経に対するイメージについて変化があった人を取り上げ、どのようなきっかけによって変化が生み出されたのかについて考察するとともに、分析概念として利用したハビトゥスの限界についても論じる。第10章では、これらの調査結果を踏まえた結論を述べる。

月経をためらう理由については、男女ともに多岐にわたっていたが、外的要因によるハビトゥスの内在化が複数の協力者に見られた。女性においては、このような理由に加え、異性への理解が得られないという懸念も理由の一つとして挙げる協力者が多かった。また、月経について話すことをためらう要因とケガレの関わりについて、まず、男性においては、確かに、ケガレと関わっていると考えられる意見も見られたが、多くのインタビュー協力者が月経に対して、普通なこと、自然に起こりうることといった、ネガティブなイメージを抱いていないことからケガレと関わっていないといえる。さらに、女性においても、月経に対してネガティブなイメージは抱きつつ

も、月経痛や、衣服などを汚してしまうことに対する嫌悪感からくるものであり、実体的イメージを伴うものである、「もの的」、もしくは、男女間など、何らかの差異に関わらず、かつ、実体的なイメージを伴っていない、「こと的」であったことから、ケガレと関わっているとはいえない。これらのことから、現代の日本において、ケガレと月経の関わりはなくなっている、もしくは薄くなっているといえる。

最後に、現代の日本において、必要な時に月経について話すことができるような社会を生み出すためには、月経についてより日常生活に即した内容の教育や、自身の性に対する教育が男女ともに必要である。また、男性においては、異性への配慮や、月経についてわからないという理由から、触れたいけど触れられないという意見が、女性においては、異性の理解が得られないかもしれないという懸念から話せないという意見が多く見られたことから、互いに話してみようという試みが社会を動かす一つのきっかけになるのではないだろうか。